研究ノート

1990年のイザイホー

－久高島のイザイホー中止に関する報告－

森田真也

はじめに

沖縄県久高島は行政区においては島尻郡知念村に属し、本島の南部東海岸知念半島から約5.3㎞の海上に位置している。長さ東西3.2㎞、幅南北約0.7㎞で面積は約1.39㎞^{2}の平坦な小島である。集落は島の南西の4分の1の空間で、島の北側にはクーボ御嶽（ウタキ）等の聖地やグショーと呼ばれる墓地がある。人口は平成3年現在で111世帯、270人で、12年前に比べると100人ほどが減少している。産業は畑作（甘藷や人参等）と漁業（マグロ、モズク等）が主体で、特産物としてはエラブウナギが有名である。また、地割制度の残る島としても名高い。

このような久高島で昨年の末から今年の初め（平成2年旧暦11月15日～18日）にかけて行なわれるはずであった、イザイホーが中止となった。12年後の再開を目指してとしているが、今後の開催には実質的にはかなりの困難が予想されるだろう。祭りの中止の決定は、沖縄研究者や芸能研究者のみならず、多くのマスコミや他の文化人をも巻き込むかたちでおおいに論議を呼び、数社のテレビ局、新聞社も特集を組んでこれを報道した。

そこで今回はイザイホーの中止の契機、そして当日の久高島の様子と新興の祭りとしてのフェスティバルの関係について若干の考察をしてみたい。なお、イザイホーの研究史、その内容[1)]については、多くの報告がでているため、ここでの紹介は必要最低限にとどめておく。

1．イザイホー中止の経緯

イザイホーとは、簡単に言えば久高島において12年に一度午年に行なわれる祭りで、島で生まれ、島の男性と結婚した30～41歳までの女性が、新たにナンチュとして島の女性の年齢階梯的祭祀集団[2]に編入される儀礼である。久高で生まれた女性はイザイホーを経験しこの組織に加入することで、正式に島で行なわれる一連の神祭りに参加することになる。そして御嶽に帰属し、御嶽の神をタマガエヌウプティシジとしてトゥパシラという香炉に勧請する[3]ことで初めて家族である夫、兄弟、息子を霊的に守護できる立場になったことを意味する。

このイザイホーが昨年平成2年の9月7日の神人（カミンチュ）会議で正式に中止となり[4]、9月25日には非公式に、神に許しを請い、12年後の再開を約束する拝みが行なわれた。これによって実質的には12年前の昭和53年の開催が最後となったわけである。

開催の是非については幾つか意見が分かれており、「必ず行なうべき」との意見もあったが、島の公的司祭者[5]の頂点とも言うべき外間（ホカマ）ノロの「神に許しを請うしかない」という意見が最終決定となったという。中にはイザイホーの参加資格の幅を広げ、島外から嫁にきた者もその対象にしてはどうかという意見もあった。しかし、上記したタマガエヌウプティシジの論理によって、島外者にその資格を与えないという、イザイホーの基本的な部分は変えられないと決定したという。先祖から、帰属すべき御嶽や御嶽の神を、継承できない者に資格は与えられないのである。

中止の原因については諸々の事情が考えられる。主な理由は、第一にナンチュになるべき（加入されるべき）女性が島にいないことがあげられる。つまり祭りの主役たるべきナンチュがいないと祭りの意味をなさないというのである。現在、諸々の条件を満たし、適齢期にあたる女性は、10人ほどいるというがそのほとんどが本島に在住している。ちなみに、ナンチュとなる女性は年々減少しており、昭和29年で36人、昭和41年で25人、昭和53年で8人であった。

第二に８人いるノロ以下クニガミと呼ばれる島の公的祭祀を司る神役が１人しかおらず、しかもその頂点とも言うべき外間ノロの健康がすぐれず祭りの先導が難しいことがあげられよう。クニガミと呼ばれる、島の公的司祭者は全員そろうと、外間ノロ、外間ノロ掟神（ウメーギ）、外間根神（ニーガン）、外間根神掟神（ニーガンウメーギ）、外間根人（ニンチュ）、久高ノロ、久高ノロ掟神（ウメーギ）、久高根人（ニンチュ）の８人となる。このうち根人の二人が男性である。現在存命の者は、外間ノロのみである。なお、外間ノロは体調が悪く本島の病院への入退院を繰り返しているのが現状である。前回昭和53年のイザイホーの時は、８人中５人しかクニガミがおらず、急遽ある門中から久高根人をたてて６人で祭りを先導した。ノロや根人は、ナンチュを認定すべき役割であり、ノロが島にいないことは祭りの遂行ができないことを意味する[6)]。いずれも終身制で代役も認められないのである。

第三には実質的な儀礼の指導者であった外間ノロ掟神(外間ノロの補佐役)が近年亡くなり、祭りの「民俗知識」が少なからず消失したこと等が考えられる。近年亡くなった外間ノロ掟神は24歳のとき、先代の外間ノロの代から、ノロの補佐役である掟神を務めてきた。約60年にわたり久高島の祭祀に携わってきた外間ノロ掟神は、祭祀の「民俗知識」の要であった。この外間ノロ掟神の死が少なからず久高の人々にショックを与えたこと、祭り全体に影響を与えたことはいうまでもない。

さらには、年間30回を越すといわれる村落祭祀と、実生活の矛盾が若い世代の祭りへ無関心、そして消極的拒否を生んでいることもその理由であろう。以前の久高島の島民のライフスタイルは、女は地割制で分けられた土地を耕し神祭りを司る、男は海人（ウミンチュ）として海で働くのが基本であった。しかし、現在島には新しい産業がなく、多くの若者は那覇市などの都市部へ出ていってしまう。島では地割制が現行のため、個人の土地の私有が認められておらず新しい産業への投資がしにくいことも原因の一つであろう。近年島の青年が何名か帰島し、モズク漁を主体として島の漁業の復興に力を入れているが、女性は進学と同時に本島へ行き、就職し、島外者と結婚という場合が多いという。島の過疎化は進行するばかりというのが現状である。要約すれば、島の社会変化に伴った過疎化、神役（クニガミ）の不在等がまねいた結果とい

えよう。

2.「ニライカナイ祭り」～拒否と受容

次に見ていきたいのは、イザイホー当日の島の様子である。先ず、その一つ目はイザイホーと「ニライカナイ祭り」の関係である。

この「ニライカナイ祭り」とは、12月31日から1月1日に知念村の社会福祉センターで行なわれた一種のフェスティバル、つまり新興の“まつり”である。内容はイベント（古典芸能）、シンポジューム、コンサートの三部構成となっており、出演団体も30を越え、新聞等の報道こそ少なかったが、なかなかの盛況であったという。「ニライカナイ祭り」開催の発端は、イザイホーの中止を契機に、沖縄の伝統文化や精神世界を見なおそうとしたものであり、世界的な平和問題・環境問題をもそのテーマにしている。開催の運動の中心となったのは、フォークミュージシャンの喜納昌吉、久高の元区長のN氏であり、そのバックボーンには沖縄を起点として現在成長を続ける新宗教団体である龍泉（イジュン）と、その教組である高安六朗が深く関わっている[7)]。

祭りは当初、久高島の小中学校の体育館と対岸の知念村社会福祉会館の両方を使って行なう予定であった。イザイホーと祭りの再生を考えて、擬似的イザイホーをここで行なおうとしたのである。ところが、実際は久高での開催は見送られるはこびとなった。区内会議へのN氏の進言と説得、直接神人へ説得にきた喜納昌吉[8)]らの積極的なはたらきかけにもかかわらず久高での開催は実現しなかったのである。

以下、「ニライカナイ祭り」の開催に対しての島民の声をいくつか要約して示してみよう。

N氏　「私は祭りの開催について、みんなを説得して一時は全員の承認を得るところまでいったんだ。ところが、一部のほんの数人の、私に反対する者の妨害にあって、祭りが出来なくなったんだ。彼らは一軒一軒家々を廻って、ついには政治的な力も使って圧力を

かけてきた。我々は決して圧力に屈したわけではない。最後には、そうまでしてやる必要はないよ昌吉、といってさじをなげたんだ。」

Aさん　「私達は最初から反対だったさ。みんな反対。青年が中心になってたみたいだけど、年寄りまで反対だったよ。」

Bさん　「イザイホー中止になってせっかく静かになってるのに大騒ぎすると、逆に神様怒らすことになるよ。それに島外の人もいっぱい来て、御嶽に入ったりして島があらされるし。イザイホーの真似みたいのしたんだって知念で、イザイホーの真似なんてそう簡単にできないよ。行った人も誰もいないよ。」

Cさん　「ニライカナイ祭りには誰もいかなかったよ。みんな反対だったし。Nさんは行ったみたいだけど。那覇の子供のところにいった人は何人かいたけどね。（祭りと）私達とは全然関係ないみたいなもんだよ。」

立場によって幾分言い分が違うようであるが、筆者の調査での印象も含めてポイントを整理してみよう。①全体として多くの人が島での開催に反対であった、②当日の参加もN氏のみ（聞き書きの限りにおいては）であった、③一部の青年層が程度の差こそあれ積極的に反対活動をした。つまり、久高での「ニライカナイ祭り」の開催運動に対する島民の多数の意見としては“NO”だったのである。

拒否の理由として注目されるのはBさんの意見である。実際的な問題としての島外者の取材・調査による弊害はさておき、「神様を怒らす」「イザイホーの真似は出来ない」といった言説は島民の信仰生活の一部を的確に表したものといえる。この正規の目的・場所以外で「イザイホーの真似は出来ない」という言葉のニアンスは、技術的なものや人数的なことを意味するのではないことは言うまでもない。島外者にとって華麗で神秘的に映るイザイホーも、彼女たちにとっては島の年令階梯的祭祀集団に編入される重要なイニシエーションであり、先祖から受け継いできたタマガエヌウプティシジを祀り、自

らのウプティシジを更新する儀礼であって、単に見せることを目的としたショーではなかったのである。

以上のように結果としてみれば、「ニライカナイ祭り」は久高では開催されなかった。しかし、島民にとってこの祭りがまったくの対外的な出来事であったのだろうか。イザイホーの当日、つまり新暦の12月31日の夜、対岸の知念半島では「ニライカナイ祭り」が、静かにその日を迎えた久高島を尻目に最高潮に達した。期せずしてその光は久高島でもよく見え、取材で来島していたテレビ局の取材人がこの光にこたえたという。島ではある者は那覇の子供の所へ、そして多くの者は様々な思いを胸に眠りについた。後述するように、イザイホーを行なうはずであったウドゥンミャーである門中の行動があったが、多くの人は普通の日と同じ夜を過ごすはずであった[9)]。ところがである。イザイホーでの夜の籠もりの際、深夜二回子の刻と寅の刻に神遊びが行なわれるが、何人かの者がこの時鳴るはずのない“ボーン、ボーン”という太鼓の音を聴いたのである。ある者は、「私達がやらなくても神様だけでイザイホーをやってるのかなぁ」と思ったという。次の日それは「ニライカナイ祭り」の太鼓の音だということが判明した。

島での「ニライカナイ祭り」の開催は表面的には否決であった。しかし、島民のイザイホーに対する強い思いは、この祭りをまったく対外的な行事と位置付けながらも、自分たちの信仰体系の一端に結びつけたのである。知念半島の太鼓の音が、本当に定時に彼女たちの耳にとどいたかどうかは問題ではない、むしろ太鼓の音の原因を「ニライカナイ祭り」に結びつけた所に注目すべきであろう。彼女たちの人生の最大行事であるイザイホーの開催は見送られた、しかし島全体の行為としてのイザイホーはなくても、深意的なレベルでは各自イザイホーを行なう必要があったのである。ナンチュになる者以外においても、12年毎に自らのウプティシジを更新することは重要な意味を持つのである。

新興の“まつり”であるフェスティバルが、純粋に祭祀の再生と簡単にイコールになるかはおおいに問題が残るであろう。この場合、彼女たちの信仰の根底を内在的に裏打ちする一つの手段として、「ニライカナイ祭り」が取

り込まれていったとするべきであろう。

3．一門中だけのイザイホー

早々と祭りの中止が決定された中一人の神役が、祭りの中心となるウドウンミャーの草を刈り始めた。ウドウンミヤーは集落の端にあり、祭りのないときは静まりかえり、新築された神アシャギ、シラタル宮、バイカンヤ（エラブウナギの乾燥所）が建っているのみで閑散とした広場である。本来ならイザイホーの前日に全員で行なう仕事である。そこをイティティグルーという下茂（シム）門中出身の神役が一人で草を刈り始めたのである。

イティティグルーという神役は、七歳の時イザイホーを創設したシジ高い（霊力の高い）イザヤーという女の子にちなんだ神役で、ナナティグルーとともに下茂門中から輩出される神役である。イザイホーのときはナンチュを指導する立場にあり、深夜子の刻と寅の刻にナナツヤーに籠もっているナンチュ達を起しに行き神遊びをさせる。さらには、神アシャギの入り口に作られたナナツハシをナンチュが渡るとき[10]、首から玉飾りをつけ「エーファイ、エーファイ」と声をあげ、彼女たちを先導する役目を持つ。現在のイティティグルーは、父方の祖父の姉から系承しており、代々下茂の娘が系承することになっている。３代前までは判るという。いわばイザイホーのための神役である。

イティティグルーは祭りの前の半年程は、毎晩夢に神が立ち眠れない日々が続いたという。イティティグルーは祭りの中止を承知で掃除を始めたのである。後に同じ門中の男性神役である、ハニマンもこれを手伝うが、若い人の手伝いはなかったという。「祭りはなくても、神様はいらっしゃるよ」、「イザイホーがないからといって神様を疎かにはできないよ」というのがイティイグルーの気持ちだったのである。

そのような中、祭りの当日となるべき日はやってきた、この日は一部の研究者とテレビ局の人々が島の民宿に泊まっているのみであった。テレビ局の者だけが何かが起こることを予期して、頻繁に出たり入ったりを繰り返して

いたという。

そしてその夜、下茂門中だけの擬似的なイザイホーが行なわれたのである[11)]。島外在住のウミトゥクとムンプジーは前もって来島していた。下茂門中のイティティグルー、アジュガユーヌカミ、ウミトゥク、ムンプジーの４人の女性神役と男性神役であるハニマンは神衣装を身につけ、門中のムトゥヤーでイザイホーの中止を神へ報告した、涙ながらの拝みであったという。その後４人の女性神役は、外間ノロ殿内（ドンチ）と久高ノロ殿内を拝み、ウドゥンミャーの神アシャギでナナツハシが渡されているものとし、七回そこを往復した。４人を照らしているのは、テレビ局のライトのみであった…。

後々４人の行動はその是非をめぐって島全体の論議の対象となるのだか、島の祭祀全体からみれば逸脱行為とされても仕方がない行為であった。しかし、４人は擬似イザイホーをやる必要があったのである。前記したように、イティティグルーはイザイホー創設の神役であり、当日はナンチュの指導を行なう神役である。イティティグルーの存在はイザイホーによって位置づけられ、確認される。現在 80 歳を越え、門中の司祭や個人的依頼による儀礼も担当せず、また公的な普段の神祭りからは引退したイティイグルーは、イザイホーでこそ霊威を発揮できるのである。

イティテイグルーとナナティグルーと二人のイザイホーに関わる神役を輩出する下茂門中、またハニマンは根人の次に男性神役では偉い神役とされ、事において根人の代行もしてきた。これらに代表されるような下茂門中の島内での位置が、彼女たちの行動を押し進めたといえるのではなかろうか。

彼女たちの行為は、下茂門中を久高の祭祀へ繋ぎ止める行為であった。「12 年後に行なう次のイザイホーために、神様につなぎをとる」ことが大事であったのだ。そしてさらには、下茂門中のみならず、久高の島民と久高の神を繋ぎ止めるための行為でもあった。聞こえてくるのは、彼女達の行為を肯定する声だけではない、しかし誰かがやらねばならなかった事である。

島の過疎化に伴い、祭祀組織は危機的な状況である。比較的都市部に近い離島で、しかも最大時で 750 人たらずの島で、長い年月これだけ多くの祭りと独自の祭祀組織を維持してきただけでも驚くべきことである。当然そこに

は、首里王朝との密接な繋がりがあったことも事実である。島は今一つの大きな転換期にきているのかもしれない。下茂門中の行為は、久高の人々から少しずつ遠ざかっていく“神”を、なんとか取り戻そうとする人々の、声にならない声を代弁する行為であったのだ。

おわりに

島外の議論としては、イザイホーを文化財指定をして保護すべきだとか、補助金を出して存続させるべきだという意見もあったらしい。これはイザイホーのみが有名になりすぎたことに起因すると考えられるが、儀礼のコンテクストとしての久高島の全体像をまったく無視したものである。イザイホーは神謡（カミウタ）と踊りを「演じる」のみ祭りではない、また単なる好事家に「見せる」ためのものでもない。久高島の人々にとっては島の信仰生活の中核をなすものである。紙上の「保護」や金銭で解決はできない。

イザイホーの中止は単に一つの祭りの消滅を意味するだけではない。前記したように女性としてイザイホーに参加すると、家レベルにおいては家族を霊的に守護する立場になったことを意味し、また島レベルでは年間通じて行なわれる多くの神祭りへの参加が義務となる。イザイホーが行なわれないということは、長期的に見ると以上のことが断絶することである。加言すれば、年齢階梯的祭祀集団に新しい加入者が更新されないまま、年月が重なるごとに現在の加入者の年齢は高くなる、70歳以上なるとテーヤクといい神祭りの参加はなくなるため、確実にその人数は減少していく。そして、祭りの参加者の減少及び祭りの縮小、そして島の全ての祭りの消滅への危険性へとつながっていく。イザイホーの中止は久高島にある多くの全ての祭りへ関係する大問題である。また、女性のみならず男性にとっても、霊的守護者を失うことになる。つまり、島の信仰体系全体の危機なのである。

既に島の公的司祭者であるノロ以下クニガミの不在によって祭りの簡略化・縮小が行なわれいる。祭りの内容も変化せざるを得ない状況である[12)]。状況に応じてウムリングワー達が儀礼のイニシアチブをとったり、ハニマン

が根人の代行をしたり、外間ノロの嫁である大里根神(ウプラトニーガン)がノロの代行をしているが、基本的に神役の代役は行なうことが出来ないとされている。不在の神役は生まれるのを待つしかないのである[13)]。

このような状況は久高島だけの問題ではなく、南島の多くの他の離島・他の地域でも共通してみられる現象であろう。昭和40年代、多くの農山村の近代化が進む中、沖縄の本土復帰とあいまって多くの研究者が、新しいフィールドを求め南島に出かけた。今やその南島も同じように、近代文明の波にあらわれようとしている。アーケタイプ（古型）を想定し祭りの消滅、祭祀組織の崩壊を嘆くより、変化や残存という言葉を越え今現在の南島の状況を鋭く見据えていく視点が我々には必要なのである。

「イザイホーなくても、神様いなくなったわけじゃないょー…」と淋しそうな顔をしたイティティグルーの言葉が全てを物語っているように思える。我々が思いを馳せるのはイザイホーのみではない、久高の人々が神様はいると認識してる限りにおいて、イザイホーは存在しつづける。我々に残された課題はいくらでもあるのだ。

＜註＞

1）沖縄県教育庁文化課（1979）及び、法政大学沖縄文化研究所久高島調査委員会（1985）の報告書を参照。

2）年齢階梯的祭祀集団とは、ここで言う場合女性のみで構成されるもので、新加入者の30～41歳までをナンチュ、42～53歳までをヤジク、54～60歳までをウンサク、61～70歳までをタムトゥという。70歳を越すと、テーヤクといい祭りの参加を免除される。テーヤクの儀礼はフバワクといい、毎年旧暦の11月の中旬に行なわれる。

年齢階梯的祭祀集団に加入した女性ことを、一般にミコといったりカミンチュと呼ぶことがあるが、いわゆるカミダーリと言われるような巫病も一定の系譜も必要なく、ノロ以下クニガミと呼ばれる公的司祭者や、ムトゥガミと呼ばれるある種の性格神に関する神役をカミンチュと呼ぶのとは基本的に異なる。

3）タマガエヌウプティシジは、原則的に長女は父系の祖母から、次女は母系の祖母から、三女以下は選定により継承されるというが、実際これにしたがう傾向を持つのは長女のみで、選定の場合が多い。

すでに、年齢階梯的祭祀集団に加入している者にとっては、これを更新する意味を持つ。

なお、トゥパシラは家を新築した際に作られる香炉である。一般的に家の入り口付近に祀られ、トゥクヌカン（床の神）やヒヌカン（火の神）と同じく、家レベルの祭祀の中心となる。トゥパシラに関しては、赤嶺（1985）参照。

4）イザイホーの年の旧暦８月に平行して行なわれる、男性の儀礼であるナージキもまた中止となった。これは15～26歳の男性の命名の儀礼であり、年齢階梯的要素も持つ。

5）久高島の公的司祭者には、クニガミと呼ばれる外間ノロ・久高ノロ以下、合計８人の神役がいる。

またこの他に、ムトゥガミと呼ばれる、ある種の性格神を祀る神役がいる。赤嶺（1983b）の調査によると、そのポストは神役により生まれるべき門中がある程度決まっており約40ある。現在これらの神役も減少している傾向にあり、筆者の調査によると村落祭祀に参加してない２人、大里根神をこれに含めて島内に10人、新しく生れた神人３人を加えて島外に８人いる。イザイホーの神話的創始者であり、イザイホーの時ナンチュを指導する神役である、イティティグルーとナナティグルーもこのムトゥガミの範疇に属す。

なお、ムトゥガミの中でも一部の者をウムリングワやティーヌユタといい、本島のクディ、オコデ（門中司祭者）に相当する機能や、いわゆるユタ（霊的職能者）的なシャマニステイックな機能をはたしている者もいる。しかし、筆者はウムリングワを単なる門中司祭者やシャーマンという言葉で括ってしまうことは適当でないと考えている。今後の研究課題として掲げておきたい。

本文では若干煩雑になるが、クニガミ、ムトゥガミの名称は神役の個人名ではなく、役職の名称を使用したい。

6）適齢期で参加資格を持っていた者で、妊娠中や子供が小さくて参加を繰り延ばした者は、サカスノネガイといい、臨時にナンチュへ編入する事もできる。

しかしこれもノロがいないことには遂行できない。実際これによって編入したものは少ないといいう。

7）筑波大学大学院生歴史・人類学研究科島村恭則氏の御教示による。氏は独自の調査による、新宗教団体龍泉の立場からの「ニライカナイ祭り」に関する論稿を用意しているという。

その他、『沖縄タイムス』参照

8）喜納昌吉は過去において久高島に一時的に居住したことがあり、島民にも著名である。イザイホーの中止に関しても、マスコミを通じた形で、「沖縄のアイデンティティー危機」とその憂いを述べている。

9）久高島においては、基本的に正月は旧暦で祝われる。

10）ナナツハシ渡りはいわばイザイホーのメインでもある。第一日目ナンチュ達は沐浴の後、ノロ殿内へ集まり円陣を作りウドウンミャーへ向かう。イザイ山に籠もる前に、ナンチュ達は神アシャギの前に埋めてあるナナツハシをイティイグルーの先導の元一列になり七回渡る。不貞をはたらいたものは、橋を渡るのを失敗するといわれ、一人前のナンチュとして認められるための選定の意味を持つ重要な場面である。

11）この模様は、某テレビ局によって録画され放送された。この放送が久高の人々に与えた動揺やしこりは決して少ないものではない。特定の神役と門中に限定されたインタビュー等その報道姿勢は問われるべきであろう。

12）実際の神祭りの場面（ハンジャナシーという毎年旧暦４月の祭り）でも、神役不在の場合はその部分の省略が見られた。また、神謡であるティルルの唱和も謡うべき神役がいない場合は省略されているようである。現在、神役で実質的に祭りの先導を行なっているのは、大里根神、シマリバー、アマミヤーであり、年令、経験、信頼ともに豊富な、先代外間ノロの実娘のヒチューザ、大西銘門中のファーガナシヌクワガミ、下茂門中のアジュガユーヌカミの３人のウムリングワー達が指導にあたっている。外間ノロの嫁である大里根神は、潜在的に外間ノロの継承権を持つが、比較的年令が若くしかも実家の大里の神を祀っているため、その位置はまだ微妙である。

13）神役が新たに就任することを「生まれる」という。ノロは終身制で代々娘継

ぎであったが、現在は嫁継ぎになっている。それぞれのムトゥガミは輩出する門中がある程度決まっており誰でもいいわけではない。神役は神に選ばれ、神の帳簿にのることであるから誰になるかは判らないという。また、一般にいわゆるカミダーリといわれるような巫病を体験し、本島のユタの判示を得て神人としての承認式であるウヤピルギを島内で他の神人の出会いのもと行うというような手続きが必要である。

近年では従来報告されていない、ヒチューザのスリクナビ（相互補助的仲）でウミナィー（兄妹の妹）にあたる神役と、アマミミツ、他女性１人の計３人の神人が誕生している。いずれもイザイホー未経験の島外在住者である。その他、筆者の調査によると、あと３人神人へ就任しそうな者もいる。今後の動向を見守りたい。

＜参考文献＞

赤嶺政信　1983a「沖縄久高島の『門中』制 —久高島村落祭祀組織理解のための予備的考察」
『民族学研究』47－4　pp.336－355

1983b「村落の霊的職能者 ーウムリングァー」
『南西諸島における民間巫女（ユタ・カンカカリヤー等）の機能的類型と民俗変容の調査研究』筑波大学歴史・人類学系 pp.57－70

赤嶺政信　1985「トゥハシリ考 ー沖縄の家の神についての一試論」『歴史手帖』13－10　名著出版　pp.17－23

沖縄県教育庁文化課編　1979
『イザイホー調査報告書』沖縄県教育委員会

桜井満　編　1979『神の島の祭りイザイホー』　雄山閣

桜井満　1991a「神の島の祭りイザイホーの行方」(1)　『國学院大學学報』367号

桜井満　1991b「神の島の祭りイザイホーの行方」(2)　『國学院大學学報』368号

桜井満　編　1991c 『久高島の祭りと伝承』　桜楓社
法政大学沖縄文化研究所久高島調査委員会　編　1985
『沖縄久高島調査報告書』　法政大学沖縄文化研究所

＜新聞・映像資料＞

「精神世界を見直そう　来月ニライカナイ祭り」
『沖縄タイムス』　1990.11.6
「神秘の祭りついに中止に」
『朝日新聞』　1990.11.9
「論壇　ニライカナイまつり」
『沖縄タイムス』　1990.12.26
「ニライカナイ祭り '91　新春の夜空にメッセージ」
『沖縄タイムス』　1991.1.7
「イザイホー中止になって…その時の久高島」
『琉球新報』　1991.1.15

＊　なお、『琉球新報』においては、平成２年１月１日から「どうなるイザイホー」「神々の島いま　イザイホーの人々」と二つの特集が組まれた。

『神女たちの声が聞こえる　久高島・イザイホー休止』九州リポート
ＮＨＫ沖縄
『海のかなたの神々』第３部　沖縄民俗ロマン
ＮＨＫ衛星

『イザイホー　1990年久高島の女たち』(16ミリフィルム)
民族映像文化研究所

＊　この他、テレビ朝日、テレビ東京でも特集が組まれた。